

カードの確率

n を 2 以上の自然数とする。1 から n までの番号が 1 つずつ書かれた n 枚のカードをよく混ぜ、1 枚取り出し、それを戻さずに もう 1 枚を取り出す。

- (1) 1 枚目に取り出したカードの番号より 2 枚目の番号の方が小さい確率を求めよ。
 (2) 1 枚目に取り出したカードの番号より 2 枚目の番号の方が小さいという条件の下で、2 枚目の番号が 1 である確率を求めよ。

2020 大阪医大 (後期)

大阪医大の入試では、問題毎の難易度に差が大きく、そのため易しい問題を確実に解くことが重要となります。この年の問題では、この確率の問題が確実に解かなければならない問題でした。

(1) 2 枚を順に取り出すときの取り出し方は nP_2

2 枚のカードの並び方は nC_2 、これを大きい方から順に並べると考えれば 2 枚目の方が小さい並べ方に対応するので もとめる確率は

$$\frac{nC_2 \times 1}{nP_2} = \frac{1}{2}$$

(2) 2 枚目が 1 のとき必ず 1 枚目のカードの方が大きい番号になる。この並び方は $n-1$ 通り

よってもとめる条件つき確率は

$$\frac{\frac{n-1}{nP_2}}{\frac{1}{2}} = \frac{2}{n}$$

仮にカードを 5 枚とすると...

		1 枚目				
		1	2	3	4	5
2 枚目	1	/	○	○	○	○
	2	x	/	○	○	○
	3	x	x	/	○	○
	4	x	x	x	/	○
	5	x	x	x	x	/

(1) $\frac{10}{20} = \frac{1}{2}$

(2) $\frac{4}{10} = \frac{2}{5}$

となりの解答が正しいことが確認できます。

検算できるときは必ず検算するのが原則です。

放物線で囲まれる図形の面積

2つの曲線 $C_1: y = x^2 - \frac{3}{2}$ と $C_2: y^2 = -2x + \frac{9}{4}$ を考える。

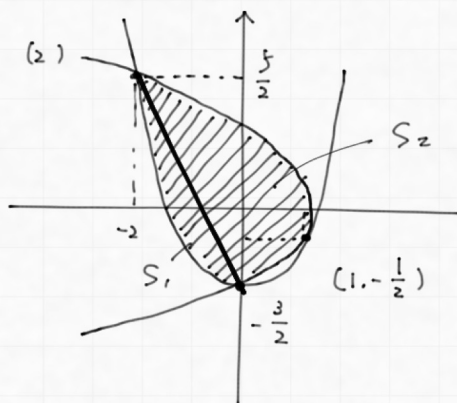
(1) C_1 と C_2 の曲交点をすべて求めよ。

(2) 2つの領域 $y \geq x^2 - \frac{3}{2}$ と $y^2 \leq -2x + \frac{9}{4}$ の共通部分 W の面積 S を求めよ。

2020 大阪医大 (後)

(1) C_1 と C_2 の式を連立 $(x^2 - \frac{3}{2})^2 = -2x + \frac{9}{4} \Leftrightarrow x^4 - 3x^2 + 2x = 0$
 $\Leftrightarrow x(x^3 - 3x + 2) = 0 \Leftrightarrow x(x-1)(x^2 + x - 2) = 0 \Leftrightarrow x(x-1)^2(x+2) = 0$

$x = 0, 1, -2$. x の値のときの y は $y = -\frac{3}{2}, -\frac{1}{2}, \frac{5}{2}$ だから交点は
 $(x, y) = (-2, \frac{5}{2}), (0, -\frac{3}{2}), (1, -\frac{1}{2})$



(1) より、 C_1 と C_2 のグラフは右のようになる。

($(1, -\frac{1}{2})$ では接している)

$y \geq x^2 - \frac{3}{2}$ と $y^2 \leq -2x + \frac{9}{4}$ の共通部分は

左の通りで、これを $(-2, \frac{5}{2}), (0, -\frac{3}{2})$ を経る線分で
2つの領域に分け、左側を S_1 、右側を S_2 とすると。

$$S_1 = \frac{1}{6} (0 - (-2))^3 = \frac{4}{3}$$

$$S_2 = \frac{1}{6} \left(\frac{5}{2} - (-\frac{3}{2}) \right)^3 = \frac{4^3}{12} = \frac{16}{3}$$

$$W = S_1 + S_2 = \frac{4}{3} + \frac{16}{3} = \frac{20}{3}$$

グラフを丁寧に書くことが大切で。

交点のうち、 $(1, -\frac{1}{2})$ は $x=1$ が重解だったので接点です。

3

(1) $x \neq 0$ のとき $-1 \leq \sin \frac{1}{x^b} \leq 1$ だから $0 \leq \left| \sin \frac{1}{x^b} \right| \leq 1$ より $0 \leq \left| x^a \sin \frac{1}{x^b} \right| \leq |x^a|$

$$\lim_{x \rightarrow 0} |x^a| = 0 \text{ だから } \text{はさみうちの原理より } \lim_{x \rightarrow 0} \left| x^a \sin \frac{1}{x^b} \right| = 0$$

よって $\lim_{x \rightarrow 0} |f(x)| = 0$ であり、 $\lim_{x \rightarrow +0} f(x) = \lim_{x \rightarrow -0} f(x) = 0 \dots \textcircled{1}$

また $f(0) = 0 \dots \textcircled{2}$ f の $x=0$ で $\textcircled{1}$ $\textcircled{2}$ より $f(x)$ は $x=0$ で連続である。

(2) $x \neq 0$ のとき

$$\begin{aligned} \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x+h) - f(x)}{h} &= \lim_{h \rightarrow 0} \frac{(x+h)^a \sin \frac{1}{(x+h)^b} - x^a \sin \frac{1}{x^b}}{h} \\ &= \lim_{h \rightarrow 0} \left\{ \frac{x^a \left(\sin \frac{1}{(x+h)^b} - \sin \frac{1}{x^b} \right)}{h} + \frac{x^{a-1} \cdot h \cdot a \left(\sin \frac{1}{(x+h)^b} \right)}{h} + \frac{a(a-2) \cdot x^{a-2} \cdot h^2 \left(\sin \frac{1}{(x+h)^b} \right)}{h} + \dots \right\} = (*) \end{aligned}$$

$$\therefore \frac{1}{h} \left(\sin \frac{1}{(x+h)^b} - \sin \frac{1}{x^b} \right) = \frac{1}{h} \times 2 \cos \frac{\frac{1}{(x+h)^b} + \frac{1}{x^b}}{2} \times \sin \frac{\frac{1}{(x+h)^b} - \frac{1}{x^b}}{2}$$

$$= 2 \cos \frac{\frac{1}{(x+h)^b} + \frac{1}{x^b}}{2} \times \frac{\sin \frac{\frac{1}{(x+h)^b} - \frac{1}{x^b}}{2}}{\frac{\frac{1}{(x+h)^b} - \frac{1}{x^b}}{2}} \times \frac{\frac{1}{(x+h)^b} - \frac{1}{x^b}}{2h}$$

$$\begin{aligned} &\sin A - \sin B \\ &= 2 \cos \frac{A+B}{2} \sin \frac{A-B}{2} \end{aligned}$$

$$= 2 \cos \frac{\frac{1}{(x+h)^b} + \frac{1}{x^b}}{2} \times \frac{\sin \frac{\frac{1}{(x+h)^b} - \frac{1}{x^b}}{2}}{\frac{\frac{1}{(x+h)^b} - \frac{1}{x^b}}{2}} \times \frac{x^{b-1} - x^{b-1} - b x^{b-2} h - b^2 x^{b-3} h^2 - \dots}{2(x+h)^b x^b h}$$

$$\longrightarrow 2 \cos \frac{1}{x^b} \times \left| x \frac{-b x^{b-1}}{2 x^{2b}} \right| = -\frac{b}{x^{b+1}} \cos \frac{1}{x^b}$$

だから

$$(*) = -\frac{b x^a}{x^{b+1}} \cos \frac{1}{x^b} + a x^{a-1} \sin \frac{1}{x^b}$$

また $x=0$ のとき

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(h) - f(0)}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{h^a \sin \frac{1}{h^b} - 0}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} h^{a-1} \sin \frac{1}{h^b}$$

$$-1 \leq \sin \frac{1}{h^b} \leq 1 \text{ だから } -h^{a-1} \leq h^{a-1} \sin \frac{1}{h^b} \leq h^{a-1} \text{ であり}$$

$$\lim_{h \rightarrow 0} (-h)^{a-1} = \lim_{h \rightarrow 0} (h)^{a-1} = 0 \text{ である。はさみうちの原理より } \lim_{h \rightarrow 0} h^{a-1} \sin \frac{1}{h^b} = 0.$$

以上より $f(x)$ は $x=0$ の x で微分可能であり

$$f'(x) = \begin{cases} a x^{a-1} \sin \frac{1}{x^b} - b x^{a-b-1} \cos \frac{1}{x^b} & (x \neq 0) \\ 0 & (x = 0) \end{cases}$$

$$(1) \quad f(x) = \begin{cases} ax^{a-1} \sin \frac{1}{x^b} - bx^{a-b-1} \cos \frac{1}{x^b} & (x \neq 0) \\ 0 & (x = 0) \end{cases}$$

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(0+h) - f(0)}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{ah^{a-1} \sin \frac{1}{h^b} - bh^{a-b-1} \cos \frac{1}{h^b} - 0}{h}$$

$$= \lim_{h \rightarrow 0} \left(ah^{a-2} \sin \frac{1}{h^b} - bh^{a-b-2} \cos \frac{1}{h^b} \right) = (**)$$

$$a \geq b+3 \text{ とき } a-2 \geq b+3-2 = b+1 \geq 2$$

$$a-b-2 \geq b+3-b-2 = 1$$

であり また

$$-ah^{a-2} - bh^{a-b-2} \leq ah^{a-2} \sin \frac{1}{h^b} - bh^{a-b-2} \cos \frac{1}{h^b} \leq ah^{a-2} + bh^{a-b-2}$$

よって $\lim_{h \rightarrow 0} \pm (ah^{a-2} + bh^{a-b-2}) = 0$ より、 $(**)$ は $(**)$ の原理より、

$$(**) = 0$$

よって $f(x)$ は $x=0$ で微分可能で、 $f'(x) = 0$

(2) について

$x \neq 0$ のとき 微分可能であることについては「明らか」としても良いと思います。

この場合、

$x \neq 0$ のとき、 $f(x)$ が微分可能なのは明らか。

$$\begin{aligned} f'(x) &= \left(x^a \sin \frac{1}{x^b} \right)' = ax^{a-1} \sin \frac{1}{x^b} + x^a \cos \frac{1}{x^b} \times (-b)x^{-b-1} \\ &= ax^{a-1} \sin \frac{1}{x^b} - bx^{a-b-1} \cos \frac{1}{x^b} \end{aligned}$$

となり、

有理数と無理数

p, q を素数とし、 $p \neq q$ とする

(1) $p^x = q^y$ を満たす有理数 x, y を求めよ。

(2) $\log_p q$ は無理数であることを示せ。

(3) a, b, c, d を 0 でない有理数とし、 $m = p^a q^b$, $n = p^c q^d$ とする。 $\log_m n$ が有理数であるための a, b, c, d の条件を求め、そのときの $\log_m n$ の値を a, b, c, d を用いて表せ。

2020 大阪医大 (後期)

(1) $x = \frac{x_2}{x_1}$, $y = \frac{y_2}{y_1}$ とする。 (x_1, y_1 は自然数, x_2, y_2 は整数, x_1, x_2 および y_1, y_2 は互いに素)

$$p^{\frac{x_2}{x_1}} = q^{\frac{y_2}{y_1}}$$

両辺を $x_1 y_1$ 乗すると $p^{y_1 x_2} = q^{x_1 y_2}$... (*)

• $y_1 x_2 > 0$ のとき、左辺は p の倍数だが右辺は p の倍数ではないので (*) は成立しない

• $y_1 x_2 < 0$ のとき、 $p^{y_1 x_2} < 1$ なので $x_1 y_2 < 0$ であり (*) は $p^{-y_1 x_2} = q^{-x_1 y_2}$ と変形できる

これは左辺が p の倍数だが右辺は p の倍数ではないので (*) は成立しない

• $y_1 x_2 = 0$ のとき、 $y_1 \neq 0$ なので、 $x_2 = 0$ このとき (*) は $q^{x_1 y_2} = 1$ となり $x_1 y_2 = 0$

$x_1 \neq 0$ なので $y_2 = 0$ 。

以上より $x = 0, y = 0$ のときのみ $p^x = q^y$ は成り立つことが分かった。 $(x, y) = (0, 0)$

(2) $\log_p q$ が有理数であると仮定すると

$$\log_p q = \frac{n}{m} \text{ とおくことができて } (m, n \text{ は互いに素な整数で } m \geq 1 \text{ とする})$$

$$\text{上式より } \frac{n}{m} = \log_p p^{\frac{n}{m}} \text{ なので } q = p^{\frac{n}{m}}$$

$$\text{両辺を } m \text{ 乗して } q^m = p^n$$

(1) より、これを満たす m, n は $m = n = 0$ に限られるから、これは $m \geq 1$ に反する

$\therefore \log_p q$ は有理数ではないから無理数である。

$$(3) \log_m n = \log_{p^a q^b} p^c q^d = \frac{\log_p p^c q^d}{\log_p p^a q^b} = \frac{c + d \log_p q}{a + b \log_p q}$$

$b \neq 0$ だから

$$\log_m n = \frac{d}{b} + \frac{c - \frac{ad}{b}}{a + b \log_p q}$$

これは $c - \frac{ad}{b} = 0$ となる $ad - bc = 0$ のとき有理数となり $\log_m n = \frac{d}{b} \left(= \frac{c}{a} \right)$

直円錐

2つの合同な直円錐 U, V よりなる立体 W がある。 U, V は頂点 O を共有し、それぞれ底面の円 A, B はただ1点 M を共有して、母線 OM のみが U, V の共通部分である。また、 A, B の中心を A, B とすると、 $OA = OB = 1$ であり、 $\angle AOM = \angle BOM = \alpha$ ($0 < \alpha < \frac{\pi}{4}$) である。

この立体 W を水平面 π 上に横たえる。 π と U, V それぞれの共通部分を通る直線を l, m とする。 A, B から l, m に下ろした垂線の足を A_1, B_1 とし、 $\angle A_1OB_1 = 2\theta$ とする。

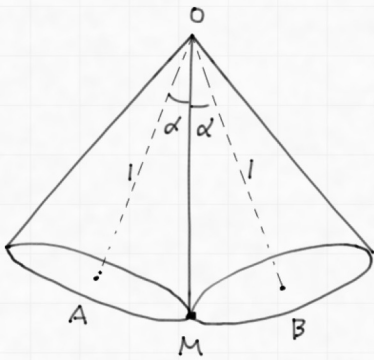
なお、以下の問いに答える際に、4点 O, A, M, B が同一平面上にあることと、 AA_1, BB_1 が水平面 π に垂直であることを証明しなくてよい。

(1) 内積 $\vec{OA} \cdot \vec{OB}$ を α を用いて表せ。

(2) 内積 $\vec{OA_1} \cdot \vec{OB_1}$ を α, θ を用いて表せ。

(3) $\sin \theta$ を α で表せ。

2020 大阪医科大学 (後期)



$$(1) \vec{OA} \cdot \vec{OB} = |\vec{OA}| |\vec{OB}| \cos \angle AOB = 1 \cdot 1 \cdot \cos 2\alpha = \cos 2\alpha$$

(2) 左下図より

$$|\vec{OA_1}| = \cos \alpha = |\vec{OB_1}|$$

$$\vec{OA_1} \cdot \vec{OB_1} = |\vec{OA_1}| |\vec{OB_1}| \cos 2\theta = \cos^2 \alpha \cos 2\theta$$

(3) 左図より

$$|\vec{AA_1}| = \sin \alpha = |\vec{BB_1}|$$

$$\vec{AA_1} \cdot \vec{OA} = \sin \alpha \cdot 1 \cdot \cos \left(\frac{\pi}{2} + \alpha \right) = -\sin^2 \alpha = \vec{BB_1} \cdot \vec{OB} \quad \dots \textcircled{1}$$

$$\vec{OA_1} \cdot \vec{OB_1} = (\vec{OA} + \vec{AA_1}) \cdot (\vec{OB} + \vec{BB_1})$$

$$= \vec{OA} \cdot \vec{OB} + \vec{OA} \cdot \vec{BB_1} + \vec{OB} \cdot \vec{AA_1} + \vec{AA_1} \cdot \vec{BB_1}$$

$$\because \vec{AA_1} = \vec{BB_1} \text{ となる}$$

$$\vec{OA_1} \cdot \vec{OB_1} = \cos 2\alpha + \vec{OA} \cdot \vec{AA_1} + \vec{OB} \cdot \vec{BB_1} + |\vec{AA_1}|^2$$

$$= \cos 2\alpha - 2\sin^2 \alpha + \sin^2 \alpha \quad (\because \textcircled{1})$$

$$= 1 - 3\sin^2 \alpha$$

$$= \cos^2 \alpha \cos 2\theta \quad (\because (2))$$

$$\cos 2\theta = \frac{1 - 3\sin^2 \alpha}{\cos^2 \alpha}$$

$$|-2\sin^2 \theta = \frac{1 - 3\sin^2 \alpha}{\cos^2 \alpha}$$

$$\sin^2 \theta = \frac{\sin^2 \alpha}{\cos^2 \alpha}$$

$$\therefore \sin \theta = \tan \alpha$$

